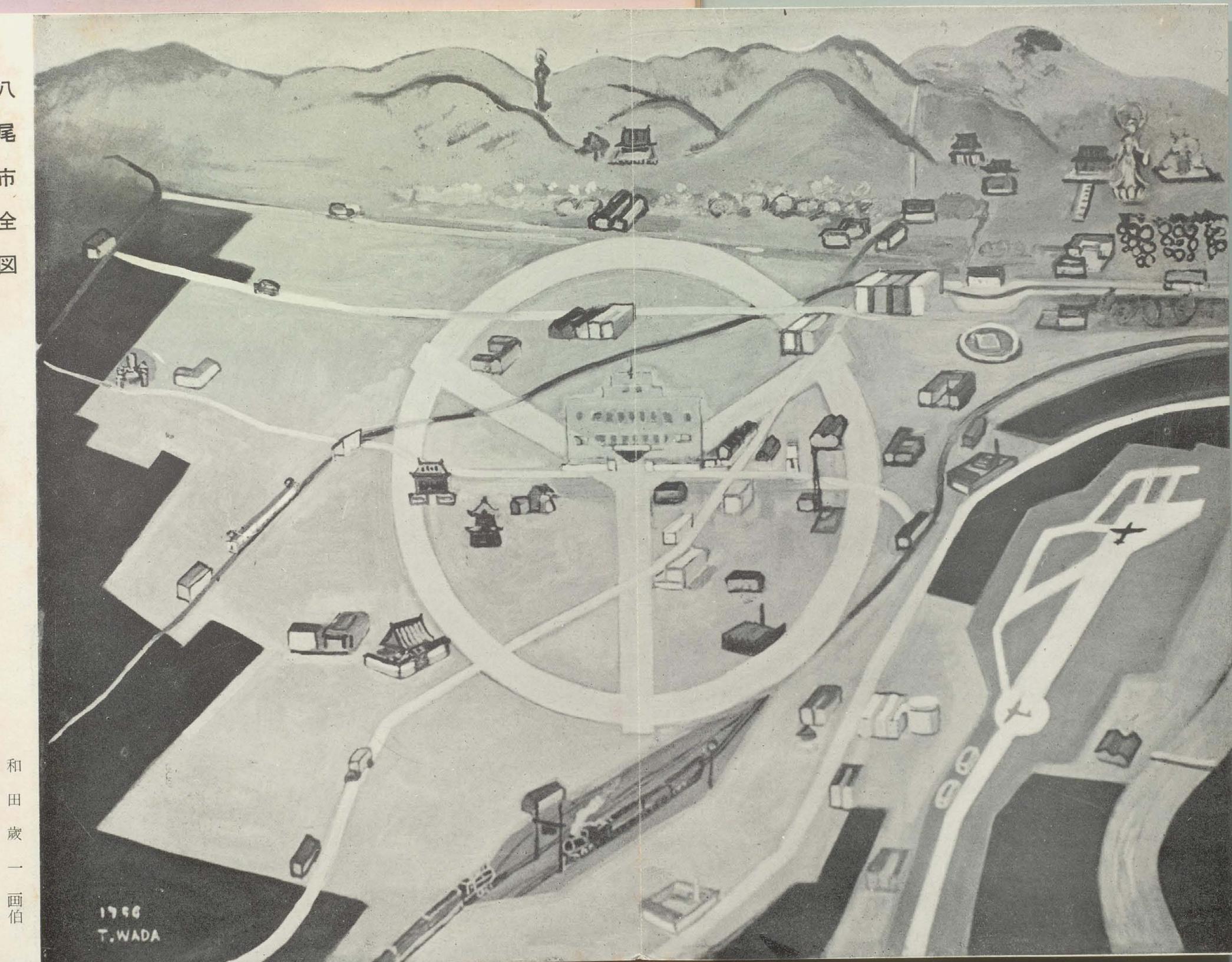


八尾市全図

和田歲一画伯

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれ真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶

八尾市全図



八尾別院又は八尾御坊と呼ばれ真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶

(1)

(1)

(2)

稱
寺
計
も

14. 名 所 旧 跡

八尾市管下指定文化財（国・府）

① 文化財保護法により指定の重要文化財

彫 刻

- (1) 木造十一面觀音立像 1 輯 (所有者) 恩智・神宮寺

明治45年2月8日国宝として指定を受けたが、文化財保護法制定により昭和25年8月29日付にて更めて重要文化財に指定せられた。

文 書

- (2) 木造制札（文治元年12月とある）1 札 (所有者) 神立・玉祖神社

明治43年4月20日国宝として指定を受けたが、觀音立像と同じく法の制定により重要文化財に指定せられた。



② 大阪府古文化記念物等保存顕証規則による指定のもの

- | | |
|----------------------|------------|
| (1) 木村重成の墓 (史跡) | 昭14. 2. 6 |
| (2) 恩智彌生式石器時代遺跡 (史跡) | 昭18. 8. 23 |
| (3) 渋川神社の樟 (天然記念物) | 昭24. 5. 9 |
| (4) 玉祖神社の樟 (同) | 同 |
| (5) 善光寺の樟 (同) | 同 |

大正天皇御立所（佐堂）

近鉄久宝寺駅北西方約1町余布施市金岡に接する所約10間周囲に植樹があつて中に丈余の記念碑があり、大正3年11月17日陸軍特別大演習の際大正天皇が行幸あらせられ約1時間に亘つて親しく御統監遊ばされた所である。（写真は御野立所記念碑）

顕 証 寺（久宝寺）

真宗本派の別院格で別名久宝寺御坊と呼ばれ、河内11郡の末寺を統轄していた巨刹である。その前身は西証寺と称し、蓮如第11男実順が住んでいた。処が実順若くして遷化し後嗣がなかつたので、享禄2年10月近江国大津三井寺の南別所近松の近松山顕証寺に在住していた蓮如第6男の蓮淳を寺号もろとも当地へ移り住せしめた。建坪総計965坪、近年まで後庭には江戸末期に作庭されたという茶室含月軒があつた。堂宇は宝永7年4月に再建されたものである。

大 信 寺（八尾）

八尾別院又は八尾御坊と呼ばれ真宗大谷派の別院である。開基は本願寺第12世教如で徳川家康の護持によつて慶

長12年3月に建立された。本堂は棟行17間梁行15間、その広間書院庫裡太鼓樓等の大建物が聳えていた。書院の襖24枚は円山応挙の筆と伝えられている。天明8年正月本山本堂炎上の際はこの本堂を解体、京都に引移し、その後憲政11年12月還付され再び当地に建つた。同寺庭園は顯証寺庭園と共に書院庭として名高く非公開である。作庭年代は江戸初期と伝えられ、細長く広大な池泉を配し、これに橋が架けてあつたがどうであるか、昭和28年3月3日突如本堂大屋根が落ち今は往時をしのぶよすがもない。坪数は本堂255坪、総坪数3,265坪。

お 速 夜 市

毎月11日と27日盛な露天市が行われている。この露天市は久宝寺御坊と八尾御坊との間数町に亘りお速夜市といわれこの両寺院に関係深いもので、お速夜は忌日又は命日の前日で例月27日は親鸞上人の速夜に相当し、両寺院ではその法要を盛大に厳修するので、近郷の善男善女が多く参詣し法話を聴聞する人が群集する処商人また集り沿道に店を張るようになつたのである。この市は古く織田、豊臣の時代から続いているようである。

大 聖 将 軍 寺 (太子堂)

草創は聖徳太子と伝えられ俗に下の太子と呼んでいる。聖徳太子が物部守屋を御討伐の時この地で両軍が大激戦を演じた。守屋の軍勢は強く太子の軍は非常に苦戦に陥り太子の御身は危くなつた。丁度その時路傍に大きな椋の木があつたので、太子はこれに身を避けられ無事に難を免れられた。太子はこれを大変喜ばれやがてこの地に伽藍を建立、神妙椋樹山大聖將軍寺と名づけられたという。後数度の兵乱に伽藍は荒廃しました明治21年の暴風に本堂は倒壊し全く旧觀を失つた。本尊は如意輪觀音で室町初期の作と思われる。また、太子16才の聖容も奉安している境内に老椋樹があり附近には守屋の首洗池、守屋の墳がある。

日 羅 寺 (木ノ本)

日羅寺は樟本神社の境内に荒れ果てた一小堂宇となつて僅に往年の名残を辛くもとどめている。開基日羅は火の葦北の国造アリス登といいう人の子で宣化天皇の御代にこの人親子が外交使節として百済に遣わされた。賢明なので百済王に愛され官につけられたが、丁度日本では任那政府の再建が計画され、半島事情に明るい日羅を召還せよとの議が起り、敏達天皇12年に紀国造押勝、吉備海部直羽島の二人を使節として百済に送り日羅の召還を申入れた。百済王は日羅を惜んで申入れに応じないので重ねて羽島を遣わし今度は強硬に談判、百済王はついに恩率、徳爾の二人を日羅に随伴させて帰国を許した。

朝廷は阿斗桑市に館を造つて日羅をおき優遇した。この阿斗桑市は木の本の古名だと伝えられここに一字を建立して薬師仏を安置したのがこの日羅寺だという。その後朝廷では、しばしば使を馳せて日羅に策を問われ彼は又つぶさにその策を具申した。百済より目付役として随伴した恩率、徳爾などは災の祖国に及ぶを恐れて帰途ひそかに謀つて日羅を暗殺したと伝えられている。

常 光 寺 (西郷)

臨済宗南禅寺派に属する禅刹で、本尊が地蔵菩薩である所から、古くから八尾地蔵という方が広く知られ、日本三地蔵の一に数えられ、古狂言にも八尾地蔵の一作がある。

寛武天皇の依頼により行基が建立し新堂寺と称した。この地蔵菩薩の本尊は弘仁年間に小野篁が彫刻したもので寛治2年に白河法皇は本尊の靈験を聞き御参詣の時人面舍利を奉納せられた。その後戦火に堂塔は大破荒廃し、至徳2年7月、また五大夫藤原盛継はこれを旧に復した。明徳2年足利義満は当寺の住持通玄東堂に帰依し荘田、梵鐘初日山及び常光寺の貢額を寄進した。これより旧号を改めて常光寺と称することになったという。天正17年には豊臣秀吉が病氣平癒祈願のため米五石を寄進し、また慶安元年8月徳川家光、寺領17石2斗余を寄進し、引続き歴代將軍より御朱目を賜わつた。

境内には八尾別当頼幸及び藤堂家臣七十一士の墓、八尾寺内村開発者森本行誓居士の供養塔がある。寺宝仏舍利、義満の宸額畠山三好氏一族の寄進状制札、応永6年の常光寺縁起、永正6年の勅進帳、嘉慶2年在銘の鰐口などがあり例年4月24日に大施餓鬼会を厳修し境内では地蔵踊という大盆踊が行われ、河内の一大物となつてゐる。

竜 華 寺 大 門 跡 (植 松)

竜華寺は称徳天皇が神護日京雲3年10月朔日に由義宮へ行幸の節遊覽せられ、当寺へ塩30石施入された事が統記に見えている。草創は奈良前記と思われるが明らかでない。その後桓武天皇延暦19年に燈明料として若江郡の田1町5反を賜施されている。以後の竜華寺については史書では明らかではないが現安中小学校の辺に大門と称する地とその大礎石が二基田の中に千古の名残を留めている。

木村長門守重成之墓（西郡）

墓は西郡北の辻北端にある。碑石高さ3尺、台石高さ約2尺、周囲1丈2尺で南面し、碑石は角であるが、殆んど円味を帯びている。この碑石は彦根藩士安藤長三郎次輝が、重成百五十忌辰に菩提のため建てたもので、この先祖安藤長三郎重勝こそは、重成の首級を挙げた人である。

慶長20年5月6日豊臣方の將木村重成は若江に陣を布き、徳川方の側面攻撃に出た。徳川方の藤堂、井伊の両隊と西郡若江に激戦を展開し重成は藤堂隊を擊破し相当損害を与えたが、ついで井伊隊の攻撃をうけ終日戦の疲労と衆寡敵せず、遂に重成は庵原助右衛門城昌の槍にかかり落馬し、安藤長三郎重勝すばやくその首をあげた。家康がこの首を実験した時ゆかしい伽羅の匂がしたので重成の用意周到さを歎賞したのは名高い話である。大正8年大阪府がこの戦跡に「此の附近重成奮戦之地」の標石を建てた。

飯田忠彦旧棲の地（慈南町）

慈南町聞成坊より東方にかけて一帯が、飯田忠彦の邸の跡である。飯田忠彦は野史291巻諸系譜80巻その他多數の著書を残した国史の研究家で、晩年は史料蒐集のため諸国を遊歴したが、その青壯の時代はこの地にあって読書に没頭した。当時は彼を評して二階の先生と渾名したそうである。先生は周防の徳山里見新十郎の二男で、幼時より明敏伶利13才で歴史に通じ、また武技にも秀でていた。

文政元年河内に遊学し八尾の大庄屋で学問を好む飯田忠右衛門は彼を迎えて嗣とした。その後安政6年江戸に赴き、天保6年華頂宮の指南役となり、ついで有栖川宮に奉仕、天保10年中宮寺宮の内客となり、去つてまた有栖川宮の侍臣として京都に住んだ。万延元年桜田門事件が勃発し、交友の関係から彼もその嫌疑をうけ、伏見奉行所に拘置され、残酷な幕吏の取調べに憤慨し割腹、時に年63才であった。

切支丹墓碑（西郷）

西郷共同墓地に一見、舟底型の碑がある。高さ2尺、幅1尺4寸8分、厚さ約7寸、表は平面で大体円味をしてその先端がやや尖っている。その上部に大きな十字架、下に横書でI H S、またM A N T Oとあり、右側に天正10年壬午、左に5月25日と刻んである。この頃は我国キリストンの最盛期で墓碑は他所にも発見されたが、大体は板碑型立石か蒲鉾型置石で年代的に見ても元和、慶長期のものが多い。然るに本碑は舟底型で時代も一層古いので学界ではこれを珍重し重要美術品に指定された。

若江城主三好義継の重臣池田丹後守は織田信長が若江城を陥れた後は信長の臣となり、若江、八尾両城の守護の任にあつた。この人は永禄6年洗礼を受けてドン・シメオンと名のつた程の篤信者で家臣も亦大多数信者になつたらしく當時八尾には大多数の信者がおり、教會堂を設けて盛に集会していた事は明らかである。八尾では古くからバテレン屋敷という約二百坪の地域がある。明治初年頃までは周囲に家が建つても、この土地だけは藪笹が繁茂していたそうであつたこの地に次のような伝説が残つている。切支丹禁制の令厳しく教會堂も破毀せねばならなくなつたのでその鐘をこの地下深く埋没したが、不思議や夜が更けると地下で鐘がうらめしそうに鳴り響いたといわれている。

伴林光平翁彰忠碑（成法寺）

幕末の頃教恩寺という荒れ果てた寺があつた。天保の末頃光平が江戸から呼び帰された時、住む家がなく人の世話を無住の教恩寺の住職となつた。時に弘化2年33才の働き盛りであつた。檀家は僅かに10数戸、貧しい生活であつたが、文久元年2月大和沿隆寺の駒塚の草庵に去るまで実に16年間この寺に住んだのである。光平は住職となつたが仏事勤行は本意ではなく、国典を講じ和歌を教え、荒陵の探査に最大の努力を捧げた。

現在この教恩寺の跡に「贈従四位伴林君光平碑」と書いた彰忠碑が建つてゐる。その裏面に光平翁伝が刻んである。碑の右側に古い瓦葺の平家の家があるこれは教恩寺の本堂を半分に縮めて建てなおしたものである。

翁は文化10年9月9日に南河内郡道明寺村大字林の尊光寺という寺の二男に生れた。6才の時母を失い同郡丹比村の西願寺に養われ、16才の春上京し西本願寺の學寮で仏学を治め、22才で本山學寮の因明論講の教授となつた。その後国学及び和歌の道を究めんと諸国を遊歴、中村良臣、飯田秀雄、加納諸平などに学び遂に天保10年27才の時、江戸で国学の大家住友に師事した。西本願寺はこれを聞いて、僧侶が国学を専攻するを非とし止むなく呼び帰され、八尾成法寺の教恩寺に入った。文久3年8月天中組の大和義舉起るや、馳せ参じて勇戦したが利あらず、同年9月25日幕吏に捕われ、元治元年2月16日52才にして、京都六角の獄にて斬られた。著書は河内國陵墓図、大和國陵墓検考、巡陵記事、難解機能重荷、河内國上古水土考、枯物語、三政一致説、於母比伝草、垣内七草、歌道大意、野山のなげき、篠屋独語など多数あるが殊に南山踏雲録は著名である。



環山樓（八尾）

八尾の豪族石田氏の設立した学舎で、その創立年代は明らかでない。享保12年に京都の碩学伊藤東涯も、この所に招かれて書を講じた。環山樓の名は青山一脈、高安山南に走り、二上、金剛の連峰が遙かにこの楼を環つて一望の裡に在り、勝景の亭館人々集つて、先人の遺書を繙き、古道を尋ね、と共に古今を慨し、その席上で東涯因んで名づけた。

当時各地に郷学、私塾の創立せられ、平野に於ける含翠堂、久宝寺には麟角堂があつて、この環山樓と共に夫々学者を招いて、講筵を開き、世人の教導に資した。享保12年京都の碩学伊藤東涯が平野の含翠堂に遊歴講説の時当地の石田利清その叔父利長、従弟可承飯田通古などこの所に会してその來講を乞い講席を開いたのであつたが、この席に受講した人に利清の弟孝鳳、従弟利鶯及び登口孤島などがありその後郷民の教化に努めたのである。（写真は環山樓全景）

翌々14年伊藤東涯はこれを偲び深い感慨の裡にこの楼記を贈つたもので利清は当時21才字は嘉右衛門義萍と号し賢明智策の才であり、弁舌を能くその識才を郷党一円に名高く、郷間の子弟などはその徳風學識を慕つて教を乞い私淑する者多く、また俠風があつて理非曲直を弁ずるのに厳正無私であつたので人々再び争うことが出来なかつたという。また知名の学者を招いて講席を設け、或は共に書を繙いて郷里の鑿鏤となつた。宝曆14年5月59才で歿した。

樟木神社（木ノ本）

延喜式に「樟木神社三座」とあるが当社で木ノ本、南木ノ本、北木ノ本の三部落に各一座づつ鎮座、祭神は布都明神で、物部守屋の靈とも伝えている。この地は物部氏の本居であつて守屋池とか稻城の跡などの伝説がある。

淡川神社（植松）

祭神は天忍穗耳命と饒速日命で他に摂社が4つある。式内の郷社で境内1,839坪、老樹繁茂して莊嚴な神域である。当社はもと旧大和川（現在長瀬川）の東北岸に鎮座していたのであるが、天文2年5月5日に大和川が氾濫し社殿が悉く流失し、現在の地に遷し奉安した。旧若江、淡川の両郡はこの川を境としていたので当社は延喜式には若江郡とあり、河内誌には淡川郡とあるのは前記の事情による。なお、境内の樟（くす）は昭和24年5月9日以来天然記念物に指定されている。

矢作神社（別宮）

姓氏錄河内国末定雜姓の部に「矢作、布都奴志乃命之後也」とあつて当地は矢作部の本居で、その祖神経津主命を祀つたのが当社の起原であろう。式内社で明治6年郷社に列せられ一名掃部宮とも、別宮八幡とも呼ばれてゐる。石清水八幡宮に現存する永久4年9月の大政官牒に石清水八幡宮の全国各地にあつた社領を明記しているが、その中に老処字掃部別宮、若江郡御供田伍町秋穀とある。これによると当地にその所領があつたため、いつの頃よりか石清水の分靈を当地に勧請し、別宮としたことが推察でき、また掃部宮別宮八幡と称する所以も知られる。

許麻神社（久宝寺）

祭神は許麻大神といふ。姓氏錄河内国諸藩に「大狛連出自麗国人伊利斯沙礼斯也、又大狛連、出自高麗溢土福貴王也」とある。この伊利斯沙礼斯の後は大県郡巨麻郷に居住しその祖神を祀つた。即ち現在の柏原町堅上の奥大字本堂の大狛神社であり、福貴王の後が本居としたのが許麻莊（久宝寺）である。河内誌に「在久宝寺村、今称天王有古筒、所謂色紙形表筒上題目、河州淡川郡許麻莊、神武、明星沢和歌日、許麻乃里沢辺爾生留杜若、君加手每乃、水也加皿佐牟神武隕名、明星沢在村西北生燕子花、首夏盛開」とあり、古来より燕子花の名所とされていたが、今はその面影も留めない。

当社は久宝寺觀音院の跡で、同院は古義真言宗洛西御室御所真光院の末寺で大悲閣と呼ばれ、記録に依れば久宝寺は聖德太子の御建立で、同太子自作の十一面觀音を本尊とし推古天皇2年3月勅願所となつて以来當國仏法の中心として栄えたが、遂に松永彈正尚秀の兵火に罹り悉く鳥有に帰した。時の住持源山和尚は、本尊を背負い伊賀

国下津に難を避けたが、永録9年5月病没するに及んで本尊はまた当地へ還されたのでここに小堂を建立し、本尊を安置した。なお同院の鐘楼にあつた梵鐘は、その響度々10里内外に及ぶといわれる名鐘で明治の初年の廢寺処分に行方不明となつたが、現在ソ連モスク・ニコライ堂に健在であるという。当社の井戸屋形はこの鐘楼を修繕して記念したものである。

八尾飛行場（南木ノ本）

全国初の民間航空基地となつた「八尾飛行場」は、昭和13年に「阪神飛行学校」として発足、昭和14年地名をとり「大正飛行場」と改称され、軍専用飛行場となり、付近の農地を強制収用の結果総面積85万6千坪に及ぶ東洋一の戦闘基地となり終戦を迎えた。

戦後は米駐留軍の連絡飛行場となり、ヘリコプター部隊が使用、その名も「阪神飛行場」となつたが、27年米軍と協定の結果、在阪各新聞社機などが飛行場の一部使用を許可され、昨年5月に米軍は撤去、同7月に米軍から日本政府に返還された。

一方付近の農民は、長さ1千7百メートルと1千4百メートルの2本の滑走路と、これを結ぶ誘導路を除いた空地に農耕を始め、「自衛隊の基地絶対反対」、「飛行場を農民に返せ」などのムシロ旗を押し立てたデモ行進により農地解放運動が続けられ、市長も議会もこの払下げを陳情の結果、昨年10月衆議院大蔵委員会の裁定により「飛行場の機能を存置し、土地は原則的に払下げる」との決定をみた。

この結果50万坪は農地に払下げ、2本の滑走路を主体とした29万坪の飛行場は新たに航空局の手で7千9百万円が投じられ大巾な補修が加えられ、本年3月末一切の施設を完了、同月31日に開所式が行われ、名称も正式に「八尾飛行場」と名づけられ全国初の民間航空基地となつた。設備は、2本の滑走路にはさまれた三角地帯の真ん中に管制塔、6百坪の格納庫、この両側につけられたフラットライトは格納庫前を照し、このすぐ横には100万燭光の航空燈台が夜空に八尾空港の位置を示している。

とりわけ、夜間着陸設備は全国で初のもので、「進入角指示燈」の設置ほか主滑走路に56燈の進入燈、滑走路燈、また誘導路には91個の誘導路燈が備えられ、航空局自慢の施設を誇っている。観光都八尾市の発展はまずこの八尾空港から訪れるかも知れない。現在陸上自衛隊第3管区飛行隊が同飛行場の東部を使用している。

左近将監恩智満一の墓（恩智）

この地の豪族で勤皇の士、志操堅固の人である。若年の頃から楠氏を挙げ高安山中に塞を築き、足利の軍を迎撃し悩ましていたが、楠氏戦い利なく共に戦死した。恩智氏は生魂命（恩智使主の後裔という）、塞のあつた所は恩智神社道にあつたと伝えられ、同社参道の傍に墓に使つた「見付石」は今もなお残つてゐるといふ。

九本桜

恩智塚の側にあつたといふ。左近の徳を慕う部下の生残り達の手によつて、左近の供養のため植えたと伝えられ、昔は大樹であり、その幹の根元から9本の太枝が出てこの名が出たといふ。その後朽ち、現存しているのはその幾代か後のものである。

高安山別名鉢伏山（高安）

市の東端、奈良県に接する所にある。遠い昔、国造時代から烽山として大和の都の守りにはなくてわならぬ山であつた。西の海（大阪湾）の様子の見張所でもあり、一旦事ある時は烽火を擧げて大和に報じたと伝えられてゐる。しかし元明天皇の和銅5年（今から1千2百52年前）正月、大和朝の都合によつて遂に取止めとなつたと伝えられている。

戦前まではその頂上にケーブルカーを通じていたが戦争のため取除かれたが、また近く再設されるといふ。頂上から大阪、六甲、神戸などが一望の下に望められて絶景である。

神宮寺（恩智）

恩智神社の神宮寺である。一名三宅寺ともいわれ、明治維新の際分離して一寺となつたといふ。本尊、十一面觀音立像（木造）は元国宝に指定を受けていたが、現在は重要文化財に指定されている。

高安城跡

天智天皇5年（1315年前）天皇は当山に行幸あつて、この地の風光絶佳と大和の守りとして好適の地と考えられ、ここに城を築かれたのである。当城は国の守りと共に畿内の上税の貯蔵所にも利用されたようで田租はもとより穀類、塩の保管にも当つた。しかし夏から秋にかけて台風が甚しいので度々修理されたようである。

天智8年8月城を修理。

持統3年10月 天皇行幸。

文武2年8月 城を修理。

同 3年9月 城を修理。

同大宝元年8月 遂に高安城を廢止した。

しかし次の元明天皇和銅5年に天皇高安城に行幸したとあるから正式な城の役目はなくなつたが、城そのものは残つてゐたようである。その後の史書にはこのことが出ていない所からみると自然に朽ちて倒壊したものであろう。後年、永禄年間（4百余年前）松永久秀ここに塞を築いて信長軍を悩ましたという。今も高安山頂に城跡と伝えられる広場がある。

高 安 の 里

この地は古くから、大和の都との交通頻繁なところで、文化も進み人情風俗もよかつたので産業も栄え、特に高安木綿を産し、河内木綿の因も、ここからと伝えられている。殊に大和朝の高官達が枚岡明神への参詣の道に当つていたからこれらのために益々繁昌したのかも知れない。この地は歌枕、狂歌などによつて古くから知られ。

高安にうつりにけりな時鳥いこまの山を越えてかたらう

源 公 朝

河内女の手染の衣うも佗びぬ秋風さむし高安の里

源 公 朝

くれぬとてひとり立田の山の端に有明の月は高安の里

鴨 長 明

夜もすがら生駒おろしに月さえて衣うつなり高安の里

読 人 不 知

雲はれぬ往馬の山のいかならんふもとの雪は高安の里

源 家 長

織しかと河内かよいの木綿買まちかね油匂う娘に

外 村 人

高安の里を見合すもめん買氣のありそなむすめ織して

班 竹

立田山あらしの音も高安の里はあれにし寺（教興寺）と答へよ

阿 一 上 人

獅子吼山教興寺（教興寺）

本尊弥勒大菩薩（伝聖徳太子御作） 一長丈 一丈余の座像一

本寺はもと大寺で伽藍なども高く美しかつたといふ。秦川勝の建立と伝えられ一名秦寺ともいつたといふ。天正5年織田信長と松永久秀との戦あつた時その兵火のためその美容を失つたといふ。（378年前）当寺中興の僧覚玄はこれが再興に志し遂に延宝7年（243年前）これを再建し今日に至つたもので現在の寺域は秦氏の建立したものから見ればずつと狭くなつた。

お初徳兵衛の供養塔

名職作者近松門左衛門は大通寺内（南高安）住職と懇意の中であつたため、長くこの寺の一間に止まり数々の名作をものしたが、中でも「曾根崎心中」は彼一代の名作と時の毒説批評家荻生徂徠も感嘆の声を挙げたといふ。事実はこの寺の寺男とその妻の戀物語りを悲恋物に書上げたと伝えられている。教興寺所蔵の「夫婦塚由来記」にはお初は曾根崎遊廓の女郎で、生れは河内高安村教興寺（字名）の宗二の者の娘、徳兵衛は木綿問屋平野屋久右衛門の養子で、久右衛門の娘おきたと夫婦にしようとした。しかし徳兵衛は思い交したお初のことが忘れかねていた。お初の父宗二の急病を2人は見舞い、夫婦にしてはしいといふ。父宗二是思い悩んだ末、住職の淨巖覺彦和尚にこのことを話す。住職は2人に色々説聞かせ、徳兵衛は同寺の僕に、お初は曾根崎に帰す。お初は年明けて里に帰り、目出度く夫婦になり、後徳兵衛が臨終の時お初の手厚い介抱を受けて永眠したが間もなくお初も病につき、徳兵衛が迎いにきた夢を見て遂に眠るように往生した。和尚はこの2人を愍に思い、2人の骨を合葬してその後に供養塔を建てたのである。

大覚山法藏禪寺（郡川）

禪宗曹洞派、本尊正觀音、弘法大師の作と伝えられ黄金仏（高さ5寸）開基の年代は古い。はじめは極樂寺と称した天正年間兵火に逢い大破したが、中興の祖好山和尚は再建の志を樹てたが達せなかつたので弟子の僧益洲に志を継がせ、現存の寺を再建したと伝えられている。

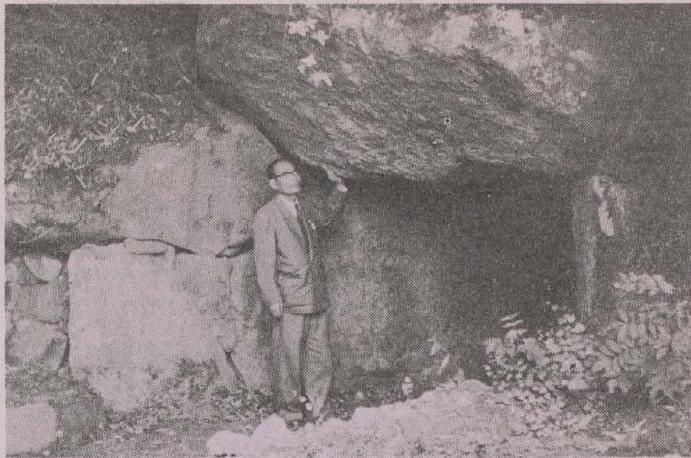
神 灵 泉（法藏寺内）

この寺には、もともと井泉なく創設以来高安山から流れる谷川の水を使用していたが長雨や大雨の時は濁つて用をなさないため困難していた。時の住職益洲和尚は7年間の祈禱によつて清水を求めるようとしたが満願の夜童神夢枕に立つて泉の場所を示したが翌朝一滴の水も得られなかつた。和尚は聞かず遂に横井戸を掘ること2町余り、ようよく水源に當つた。和尚はこれを神靈泉と名付け今でもどんなに日照が続いてもこんこんと水はつきないと。

千 塚

(服部川・郡川・千塚)

この地区内に約6, 70カ所も塚がある。塚にはそれぞれ7尺乃至1丈程の入口をもつ、深さ6, 7間位の穴がある。大古の穴居生活の跡か、一説によると大昔、この地方に恙虫が多く発生したことがあり、そのため家に住むことができず穴居したものであろうといわれている。今でも中の土を掘ると陶器や玉などができる。人よんで千塚または鬼の手塚という。(写真は塚の入口)



(山畠)

真徳磨(俊徳丸)古跡 一名鏡塚

昔、山畠に百済王の後裔にて山畠長者といふものがいた。信吉長者ともいつたが、この家の長男に俊徳丸(真徳磨)といふ美男がいた。隣村の藤山長者の娘と結婚して、永く栄えたと伝えられているが、この俊徳丸の母は義理の中で義弟にその後継をさせようとして悪企みの末、毒を飲ませたが天王寺の仏恩によって助けられ、悪は亡びるという勸善懲惡の物語がある、この夫婦の受難物語が後年、謡曲「弱法師」として戯作された(延暦年中)。また淨瑠璃「逢魔カ辻」もこの弱法師を戯曲されたものである。

この高安の里から四天王寺に通ずる参拝道を世に俊徳道といわれている。

玉祖神社(神立)

祭神 玉祖命・明玉命

玉造氏の祖先を祀る。十三峠の登り口に在り、境内に大樟あり、天然記念物(昭24.5.9)の指定を受けている。延喜式によれば和銅3年(1,246年前)の創建とある。

末社=吉野三十八所神、住吉、八王子、蛭子などあり。祭日は10月10日。

当社には木造制札(文治元年12月の日付あり)あり元国宝の指定を受けていたが、現在では重要文化財として指定されている。

菌光寺=玉祖神社の神宮寺

真言宗、本尊は千手観音で壱演僧正の作といわれ、壱演僧正或時玉祖の神を夢に見、神体を刻むこれが千手観音である。寺宝に源氏の大将梶原景時の制札がある。文面には「河内国菌光寺者、鎌倉之御祈禱所也、村寺並田畠山林木甲乙人等不可有乱入妨之状如件」とあり昔は相当の格式があつた。

十 三 峠 (神立)

神立から奈良県南葛城郡との境界での約23町、嶺に至るまでの路傍に塚十三あり、そのためこの名がある。昔は大阪から奈良へ出るには、この峠か、暗り峠を通るか、或は大和川の流域を通るよりか道がなかつた。その中でもこの峠が畜田や法隆寺に出るのに一番近路で、一番楽な道でもあつたので通行人が絶えなかつたという。今は木とりの他は通らないので淋れてしまつた。家庭用のハイキングコースには最適の地で、峠の眺望は絶佳である。

水呑地藏(神立)

神立より約14, 5町登った十三峠の途中に石の地蔵尊が祭られている小堂がある。昔、この峠が通行人の多かつた頃、茶屋のあつた所で、その茶屋には美味しい水の湧く泉があつて旅人を喜ばせていた。その水が何時の頃からか薬水で脚気には大妙薬ということが伝えられ、地蔵に詣でて、その薬水をもらい病人に与えるようになり、今も善男善女の参詣人が多い。

恩智神社(恩智)

元大阪府社で、祭神は恩智大神、食津彦命、大御食津姫命を祀る。創建は詳細にわからぬが、枚岡神社より古い時代からあつたようで、約一千3百年以前に建立されたものであろう。

○文德天皇嘉祥3年10月、贈正三位

○清和天皇貞觀2年正月27日、贈従二位

恩智左近、神宮寺小次郎などの産土神である。祭日は6月27日。

高座神社（教興寺）一附 梅岩寺

祭神は天國照彦天火明櫛玉饒速日命・高倉下命・伊勢津彥命・伊勢津姫命・高御產集日命で教興寺山中の岩窟中にある。俗に弁財天ともい。清和天皇貞觀元年正月27日贈従五位上。境内に小滝あり、「白飯の滝」という。禊（みそぎ）の行場として参拝者絶えず、附近に桜の名所梅岩寺がある。祭日は6月7日。

業平朝臣河内通い

恋の水（山畠）

中納言在原業平は一代の美男であつたが、ある時、枚岡神社に詣ぜんとして、この里を通つた時、僅には、まれな美女が硯の水を汲もうとして、池の水に手を入れていた。その姿といい、顔といい水もたれる程の美しさに、業平は唯うつとりとしてみとれていた。それから、毎夜の如く大和からはるばるその娘に逢いに来たという。この池が2人の恋の媒となつたので、この池を人呼んで恋の水とい。

笛吹松（神立）

十三街道の峠にあつた。業平朝臣は山畠の美女のもとに通う時、必ずこの松の木の下で横笛を吹いて女に自分のことを知らせて逢つていたとい。今ある松は何代か後のものである。

衣懸岩（神立）

笛吹松の根元にある。業平が河内通いの時、上衣（肩着）の袖が露に濡れることを防ぐため、これから下へ降りる時は必ずこの岩の上に衣をぬいで通つたと伝えられている。

別れの水（神立）

業平は妻ある身でありながらこの河内通い。この不実の夫であるにも拘らず家の妻（紀有常朝臣の娘）は美人であり、貞女でもあつた。毎夜の如く家を出る夫に対しても、まめまめしく仕えて何の不足も言わなかつた。如何に業平といても、ちと後髪ひかれる思いであり。ある夜、いつもの通り山を下りたが、いつもの場所にも娘が待つておらず、不思議に思いながらも、娘の家の傍にきて東窓の障子のすきまから中をのぞいた。娘は鉢から飯をよそつて食べていた。その姿が何とも早や浅ましい姿であったので、百年の恋もさめ果てて、声も掛けずに、そこを立去つた。娘は食の中ぼで、ふと障子にうつる月影の中に業平の来訪を知り急いで家を出た。しかし業平はもう、はるかの方に足早に去つてゆく。娘は無中で後を追つたが、山の道では女の足は遅い。それでも息せき切つて山道を登つた。業平は、女のものすごい姿に恐れをなして傍らの松によじ登つて枝の間に身をかくした。娘はあらぬ姿のまま、松の木の傍の池で喉をぬらした。娘は、ふと池の中に男の顔を見出すと、それが影とも知らず、業平の名を呼んで、池の中に身を投じた。男に捨てられたと知つた娘は、その時、すでに乱心していたのであろう。この池を姿見の池、別れの水とも伝えられている。それから後、村では娘をもつた家は決して東窓を作らないようになつたとい。

由義宮跡（八尾木）

称徳天皇（女帝）は美男の僧弓削道鏡を大そう籠任された。道鏡は物部氏の後裔で、志紀郡（今の志紀町）の豪族の出である。天皇は彼の故郷に行幸され、その土地の美しさを愛され八尾木を中心に都を造ることを命ぜられた。（称徳天平元年10月）。道鏡は早速、3郡（大県・若江・高安の各郡）に亘る広大な土地を開いて由義宮を造つて天皇を迎えた。そして河内国を廢して河内職を置いて政を見させた。これを西京とい。宝亀元年正月、河内職に命じて土地の70才以上の老人を呼びよせて宝錢を与えた。その宮域は奈良の都に模して広大なものであつたとい。しかしながら天皇はにわかに病を得て倒れられたので急いで奈良の都に遷御されることになり（宝亀元年8月）間もなく薨去された。由義宮時代は僅かに6年であつたとい。今も、その跡と思われる、都塚、刑部、別宮、八尾木、八尾座、などの地名がある。

明川（曙川）

聖徳太子は、物部守屋の無暴な振舞（仏像を池の中に投じた）に腹を立て、兵を進めて守屋を討とうと、夜間に軍を進発この川のほとりまで来た時、夜がほのぼのと明けそめた。も早や守屋の陣も近いこととて率先よしとばかり一気に守屋を攻めたて、戦いに勝つことができたとい。太子は、この川を名付けて明川と呼んだと伝えられている。しかし今の曙川は当時の何分の一もない小川になつてゐる。

15. 名簿

歴代市長

| 順位 | 氏名 | | | | 就任 | 退職 | 備考 |
|----|------|----------|----------|--|----|----|---------|
| 初代 | 脇田幾松 | 昭23.5.10 | 昭27.5.9 | | | | |
| 二代 | 脇田幾松 | 昭27.5.10 | 昭30.4.14 | | | | |
| 三代 | 古藤敏夫 | 昭30.4.15 | 昭30.4.29 | | 現在 | | 市長職務代理者 |
| | 脇田幾松 | 昭30.4.30 | 現在 | | | | |

助役

| | | | | |
|--|------|-----------|-----------|--------|
| | 森倉政治 | 昭23.6.1 | 昭25.1.31 | 収入役へ |
| | 森倉政治 | 昭23.12.25 | 昭27.12.24 | |
| | 森倉政治 | 昭27.12.25 | 現在 | |
| | 森倉政治 | 昭30.11.1 | 現在 | 2人制となる |

収入役

| | | | | |
|----|------|---------|----------|--|
| 初代 | 森倉政治 | 昭25.2.1 | 昭29.1.31 | |
| 二代 | 森倉政治 | 昭29.2.1 | 現在 | |

市会議長

| | | | | | | | |
|----|----------|-------|---------|---------|---|--|--|
| 初代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 二代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 三代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 四代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 五代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 六代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 七代 | 辻今石羽谷谷羽多 | 村田野口多 | 乙安善与安安与 | 三司硯八吉吉久 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |

市会副議長

| | | | | | | | |
|----|---------|-------|------|---------|---|--|--|
| 初代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 二代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 三代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 四代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 五代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 六代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |
| 七代 | 松石羽川高田金 | 村田野口多 | 富善与次 | 藏硯久郎一郎郎 | 昭23.5.14 昭26.3.5 昭27.5.16 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.5.13 昭31.5.8 | 昭26.3.5 昭27.5.5 昭29.10.8 昭30.2.5 昭30.4.12 昭31.5.8 現在 | |

市議会議員

(昭和30年5月1日現在)

| 議席 | 氏名 | 住所 | 生年月日 | 職業 | 電話番号 | | | |
|----|------------|-----|-------|-------------|-------------------|----------------|--------|-------------|
| 1 | 貴谷金桶御島口井口内 | 正安次 | 男吉郎三郎 | 樂音寺520穴太390 | 明32.10.22明36.4.30 | 業長職役業社重社工社物販賣業 | 千八河内 | 30267 |
| 2 | 中田畠日島植当森田中 | 義次 | 吉郎一男郎 | 久宝寺2,340 | 明28.6.26 | 農会無会農会木会金穀 | 東八恩川八 | 491871 |
| 3 | 中吉野田内山代西 | 幸 | 恒太郎 | 福万寺1,552 | 明37.7.18 | 明37.9.23 | 原塚智 | 179 |
| 4 | 中吉野田内山代西 | 正政 | 寅太郎 | 久宝寺2,597 | 明35.10.2 | 明41.2.3 | 柏千恩 | 2654 |
| 5 | 中吉野田内山代西 | 次 | 三三太郎 | 龜井235 | 明25.4.15明36.5.15 | 明29.1.6 | 緒籍 | 1471,037(乙) |
| 6 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 中野290 | 明36.2.5 | 明19.9.24 | 花書尾 | 575 |
| 7 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 恩木智1,203 | 大3.9.23 | 明36.5.15 | 商工事務局常 | 841 |
| 8 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | ノ本434 | 明41.2.3 | 農米農無生 | 尾尾 | 888 |
| 9 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 中405 | 明29.1.6 | 穀 | 尾尾 | 1,065(乙) |
| 10 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 太田1,520 | 明19.9.24 | 明42.11.11 | 製販 | 212(呼) |
| 11 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 畠388 | 明36.5.15 | 明29.9.5 | 造壳 | |
| 12 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 智1,347 | 明31.2.10 | 大4.4.12 | 常勤 | |
| 13 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 太田1,555 | 明23.11.5 | 明27.1.15 | 事務局常 | |
| 14 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 郡1,221 | 明42.11.11 | 明36.9.25 | 常勤 | |
| 15 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 郷1,029 | 明29.9.5 | 大4.4.15 | 事務局常 | |
| 16 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 畠349 | 大4.4.15 | 明27.1.15 | 常勤 | |
| 17 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 本内348 | 明36.9.25 | 明27.1.15 | 事務局常 | |
| 18 | 中吉野田内山代西 | 次 | 寅太郎 | 山庄32 | 大4.4.15 | 明36.9.25 | 常勤 | |
| 19 | 中吉野田内山代西 | 次 | 俊竹代千 | 西西山32 | 明27.1.15 | 大4.4.15 | 事務局常 | |
| 20 | 中吉野田内山代西 | 次 | 俊竹代千 | 山莊32 | 明36.9.25 | 明36.9.25 | 常勤 | |